

## 脱原発社会のモデル＝トランジションタウンのコツ⑨



中園順子

# 敵をつくらない。 リーダーもつくらない。

「地域のつながりを回復し、小さな低エネルギー型循環型社会をめざす市民発の動き」という意味では、日本では2008年にはじまったトランジションタウン（以下TT）は、むしろ後発といえるでしょう。

しかしTTには、後発ならではの視点があります。他の先駆的活動が陥りがちだった失敗を研究し、同じ轍を踏まないための、小さなコツのあれこれがあります。

そのひとつは、活動グループのあり方で

す。組織という言葉からピラミッド型を連想する人も多いほど、組織＝ヒエラルキーである場合が多く、フラットな組織を標榜していても、その内実は1人または少数のリーダー的な人に率いられている場合が多いものです。

そのようなスタイルでの市民活動では、多くの参加者がお金を払ってイベントに参加するだけの「お客さん」的振る舞いをします。理由は「リーダーやコアメンバーた

ちに遠慮して」と「ラクチンだから」が半々でしょう。

その結果、活動というよりサービス業のようになってしまったり、リーダーやコアメンバーが固定化し、その人たちの負担が恒常的に重くなったり、そのため燃え尽きやすくなったりするばかりか、組織そのもののへの所有感や執着が出てきたりもします。

TT的持続可能なおすすめプランは、ドーナツ型で、かつ、外に開いた組織です。興味のあるテーマごとの部活のようなワーキンググループが複数あって、それらグループの代表者によるフラットな連絡グループはありますが、その真ん中は中空にしておくのがコツです。

代表と呼ばずに、言い出しっぺと呼ぶ。参加する人全員がリーダーで、ひとりひとりの情熱がエネルギー。日本でも世界でも、TTは「人の主体性と自発性が最大限に発揮されるためには？」を日々考えながら活動しています。